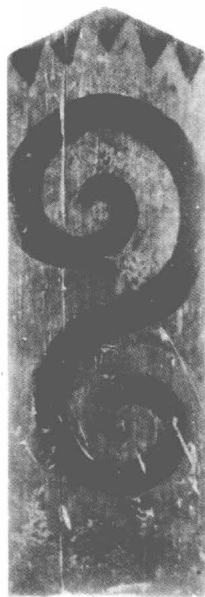


司馬遼太郎・翔ぶが如く六

司馬遼太郎
翔ぶが如く 六

文藝春秋





翔ぶが如く 六

昭和五十一年九月三十日 第一刷

著者 し ば り よ う た ろ う
司馬遼太郎

発行者
檜原雅春

発行所
株式会社 文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三
電話(東京)二六五一―一二二二番
郵便番号 一〇二

印刷所 大日本印刷
製本所 大 口 製 本

*万一、落丁乱丁の場合はお取替えいたします

目次

雷 発 7

熊本鎮台 27

籠 城 35

炎 上 45

肥後の野 54

二・二二の戦闘 63

二十三日の木葉 108

浅き春 126

菊池川
138

高瀬の会戦
144

野の光景
180

地鳴
198

田原坂
221

警視隊
259

激闘
282

衝背軍
304

付・関連地図
327

装幀 栗屋 充・地図 高野橋 康
カバー写真・加曾利B縄文土器 部分（水戸・マロン美術館蔵）
扉写真・隼人の盾（奈良国立文化財研究所蔵）

翔ぶが如く
(六)

雷 発

新曆二月十二日というのは、旧曆では大晦日おひそかにあたる。薩摩では、公文書こそ太政官が採用した新曆を用いていたが、大方の暮らしは旧曆によっておこなわれていた。

「あすは春じゃというのに」

と、街路をゆく町方のひとびとは真冬のように着がさねをして、人にあうとかならずこの異例の寒さについての感想を、あいさつ代わりに交換している。南国の薩摩では、旧曆の十二月には梅の花がひらく。新春ともなれば桃が咲きそめるのだが、ことしは桃のつぼみが固かった。明けて二月十三日は、旧曆の元旦である。しかし元旦をことほぐ酔客を街路で見るとはまれであった。街路

は薩軍の兵士の往来がめだち、かれらは人相に出陣の間近さを思わせている。

庁下（旧城下）へ屯集した者のうち、早い者は二月五日ごろからきて民宿しており、それがもう一週間以上になるために、

——本営ではなにをぐずぐずしているのか。
といういらだちが見えていた。

兵は、たしかに逸はやっていた。戦国以来の習風の中にある薩摩人の多くは、何よりも戦いというものが、男子の一生にとつての唯一の晴れのものであるということが、政治上の是非善悪などとは無関係に、それを越えて信仰以上のものになっていた。戊辰戦争ぼしんのときに年齢が幼くて出られなかったものはそれを悔しく思ってきたものだが、こんどこそその晴れが自身の身にも訪れてきたのであり、そのよろこびがかれらをひたしていた。厭戦気分えんせんなどというものは、日本の他の諸旧藩なら知らず、薩摩にかぎってはおよそ無縁のものだということがいえるであらう。

ただ、県下の県庁御用商人だけは、資料にこそ残っていないが、暗い表情でいたかと思える。県庁では、旧暦大晦日に支払わさるべき納入品の代金をかれらに支払っていない。おそらく、大山県令の会計上の処断が、商人たちのあいだに伝わっていたであろう。大山県令は商人たちに支払うべき金まで薩軍本営に渡してしまったのである。

この旧暦の元旦の早朝、厩跡の私学校本営では、簡素ながら新年の賀筵をかね、門出の祝いの小宴がひらかれていた。肴は、古来の武門の法にしたがい、するめや勝栗のたぐいであつた。この小宴にたえずすわっていたのは桐野、篠原ら将領級のひとびとだけで、他の小幹部級は屠蘇酒でわずかにのどをしめすと、すぐ忙しげに出ていった。すべての軍隊機構はよく作動し、すでに動きはじめていた。

午後になると、庁下の辻々に掲示が貼^はり出された。「あす十四日午前九時、全隊集結せよ」という旨の掲示である。集合所は、旧藩以来の練兵場

である伊敷村玉江練兵場であつた。

この日、雪がふりはじめていた。

「前夜から降り始めた雪は……」

と、この掲示板を見たアーネスト・サトウも、この日の午後の気象についてふれている。

二月十四日は朝から雲が低く、寒気はいよいよまさりはじめている。この朝、未明から鹿兒島庁下で人々がしきりに動き、二つの重要な事柄が、未知の将来にむかつて出発した。

この朝、県庁から県外にむかい、二組の使者が出発した。県ではこれを専使とよんだ。一組は県属永吉小藤治とその属僚一人で、かれらは大山県令から三条太政大臣への上書をたずさえており、行先はいうまでもなく東京である。

いま一組は、おなじく大山県令に使者として選ばれた県官原作蔵、篠崎新平らで、かれらは熊本鎮台への使者であつた。

熊本鎮台への書簡は、二通ある。一通は、

「鹿児島県令 大山綱良」

が差出人で、あてなは、熊本鎮台御中、とあり、直訳すると、

「別紙書面一通、陸軍大将西郷隆盛より、其鎮台へ依頼につき、送致しますので、御落手くださるよう」

という簡単な文面である。

別紙書面というのは、「陸軍大将 西郷隆盛」が差出人で、あてなは、熊本鎮台司令長官ということになっている。

この書簡は、西郷の直筆ではなく、西郷が大山県令に起草方を依頼し、大山が県官の今藤宏に書かせたものである。

原文は、いかにも簡潔である。

拙者儀 今般 政府へ尋問の廉有^{かど}之^{これ} 明後十七日
県下発程 陸軍少将桐野利秋 篠原国幹及び旧兵隊
の者 随行致候間 其台下通行の節は 兵隊整列

指揮を可^レ被^レ受^ル 此段及^ら御照会^{さうご}候也^{まう}

自分はこのたび政府に尋問すべきことがあつて明後十七日に鹿児島県を発する。ついては陸軍少将桐野利秋、篠原国幹および旧兵隊の者が随行するので、貴鎮台のそばを通過するときは、貴官は鎮台兵を整列させ、私の指揮を受けられるべく、この段、通知する。

というこの文章は、これを受けとる鎮台司令長官からみれば、傲慢^{ごうまん}ともなんとも言いがたい印象をうけるであろうし、いかに懦弱^{じやくじやく}な司令長官でも、この権高な書状を見れば、勃然^{ぶつぜん}と抵抗心をおこすに相違なかった。

西郷のもとへは、写しが届けられた。

西郷はさすがにおどろき、「この手紙をみては、どういう事変がおこるかもしれない」として「早々、御取消し成し下さるべく」と県令と今藤宏あてに書面でもって申し入れているが、すでに専使は出発したあとで、及ばなかった。西郷が、これほど重要な書状でさえ自分で書かなかつたという点でも、この時期のかれの模様が察せ

られる。

「伊敷」

という地名をいうだけで、このころの鹿兒島では、旧藩以来の練兵場の別称のようになっていた。

伊敷村は鹿兒島県庁下を北西から貫流している甲突川ぞいにあり、河口からいえば一里半ほどさかのぼる。この野は奈良朝のころから美田として知られていたらしく、延喜式の古社である伊爾色神社などがあるが、幕末、島津斉彬は川ぞいの玉江とよばれたあたりの湿地を埋め立てて洋式訓練の広場をつくった。

「十四日朝九時に、伊敷村玉江練兵場で出陣のための閲兵がある」

ということとは、私学校本營の手で市中くまなく揭示されたために、この朝、庁下や各郷から見物人が、ほとんど殺到といえるほどに、この河畔の広場にあつまりつつあった。

兵士たちも、集合が午前九時というのに、夜があけて

ほどなく、三々五々とあつまってきた、午前八時ごろには、各大隊の人数がほぼそろってしまった。ただし、郷士だけの二個大隊はこの日の朝、加治木に集合して先発したために、ここに参加していない。

兵士（校徒）たちの服装は和装もあれば、軍服、あるいはダンブクロ姿などまちまちだったが、だれもが白もめんの兵児帯を締め、それへ大刀をぶちこみ、銃をもっていた。

服装がそうであるように、銃の種類も、まちまちだった。城下士の者は、経済力があつたためにかねて自弁で洋銃を買って用意していたが、郷士の校徒には、数日前に、各郷の分校から無料で支給された。校徒でない郷士の者のうち、火縄銃をもっている者さえ数人いた。日本の幕末からこの時代にかけて、欧米では銃の性能が日進月歩していた。そういう意味でいえば、いま薩人たちの手にしている銃は戊辰戦争の段階でとどまっており、洋式銃とはいえほとんどが旧式のものになっていた。

小隊長や半隊長はかつて陸軍や警察にいた者が多く、

それらは将校服や下士官服、またはバリのポリスの服に似た警視庁の制服を着たりしていた。

なかには海軍将校の礼装を着用している者もあり、またかつて文官だった者は、詰襟服やフロック・コートなどを着ていた。

整列の方法については、本営付の係員が駆けまわって、各大隊、各小隊の位置や順序を指示した。

やがて全体として、方陣ができあがった。

整列がおわるころに、大隊長たちがそれぞれ馬に乗り、自分の大隊の先頭に位置した。

桐野利秋と篠原国幹は金モールで飾った陸軍少将の軍服をつけていたが、もつとも注目をひいたのは、文官の村田新八の馬上の姿だった。かれは外遊のとき礼装用に用意していた山高帽をかぶり、燕尾服をつけ、腰に大刀を帯び、ズボンに脚絆をつけ、その足もとといえは草鞋で、左手に手綱をもち、右手に真紅の指揮旗をもってあらわれた。

各大隊が整列を終えると、寒風がいよいよつよくなり、粉雪がまじりはじめた。

その風と雪の中に整列している薩軍を近くの玉里の丘から見おろせば、東西南北に四つの密集団がそれぞれ方形をつくり、その四つの方陣がすべて中央にむかっている姿は、近江源氏の定紋である四目結を連想させるであろう。

東に、一番大隊と二番大隊が密集し、西に二個砲隊と輜重隊が密集している。北に密集するのは五番大隊であり、南は三番大隊と四番大隊であった。それぞれが、中央の空間にむかって胸を張っていた。

定刻の午前九時になると、フランス式のラッパが寒風を研りさくようにして鳴りわたった。

それを合図に、北方に群れていた一団の人馬が中央にむかってうごきはじめた。

その一団は、三騎を中心として三十人ばかりの護衛の徒步兵でもって構成されていた。中央の三騎のうちの二騎は、西郷の副官格の淵辺群平（高照）と仁礼景通である。

かれらは先頭の一騎の背後に従っていた。

先頭の一騎は、西郷隆盛である。

西郷の馬上姿というのはほとんど珍奇に属するであらう。桐野でさえ西郷が馬に騎つた姿に記憶はなかった。西郷は鳥羽伏見の戦いでも終始徒歩で指揮をした。明治初年、陸軍大将として演習を総監し、天皇に従って閲兵したときも、騎馬の天皇の背後から陸軍大将の正装のまま徒歩で従った。

かれの馬嫌いは、その巨大な体軀が、当時、馬格の小さかった日本馬に騎るのに適さなかったということもあるし、いまひとつは、幕末の大島流謫中に、風土病をわずらったため、鞍にまたがるのが苦痛だったということもある。

風土病は、西郷の鞆丸を巨大にした。このため馬上の姿勢をとるのが不自由だったことと、冬は鞆丸が冷えるようであった。この日も西郷は防寒のために鞆丸に袋をかぶせていた。袋はかれが考案してひとに作らせたもので、兎の毛皮を縫いあわせたものであった。

西郷は陸軍大将の正帽と制服をつけ、足もとは革足袋をはき、あたらしいわらじでかためていた。

全軍の兵士で、九割ぐらいいは、西郷陸軍大将というものを、このときはじめて見た。馬は小さな薩摩馬であったが、西郷がのつたために驢馬ほどにちいさく見えた。たれもがこの生きながらに神格化されている馬上の人を見、その風采が尋常をはるかに超えていることに、いよいよ神秘的な感動を覚えたはずであった。

西郷が中央の空間に乗り入れると、桐野少将ら各大隊長は隊列を離れ、西郷のあとに従い、ともどもに各隊を檢閲した。

西郷は、馬を立てつづけている。馬丁が用心ぶかく手綱をにぎっていたが、馬はしきりに後脚をあがさせた。閲兵の時間が長くゆるやかに流れるが、西郷は帽子の下から深淵のように大きな目をのぞかせたまま、終始、無言だった。

やがて、大隊長級が集まり、多少の相談をした。その

あと、西郷の言葉であるとして、「命令」が各隊に伝達された。

伝達する声は、大きくはない。ともすれば、風に吹きちぎられた。方陣は沈黙していた。沈黙する部隊ほど強いというのは、日本においても古来、法則のようにいわれてきた。

命令というのは、

「明十五日から、日を逐^おって出陣する」

というものであった。出陣については、道路がせまいうえに途中の各村の宿泊能力が低いために、各大隊が毎日逐次出てゆく。十五日に出発するのが、一番大隊と二番大隊だった。

十六日が、三番大隊と四番大隊。十七日が、五番大隊と砲隊、輜重隊である。

出発の日は、いずれもその日の午前六時に私学校本営に集合し、午前八時に熊本にむかって行軍を開始する。そのように指示された。

この西郷命令は、各隊長から各半隊長へ、各半隊長か

ら各兵にむかって達せられた。それが各人の耳に入るころ、自然にわきあがった歓声が、やがて潮のように高鳴りつつ、川の両側に蟠^{わだかま}る丘陵にこだました。

閱兵式は、それらをふくめて二時間でおわった。午前十一時すぎ、ふたたびラッパが鳴りひびき、閱兵の終了を告げた。西郷は二人の副官と護衛兵をひきつれて南にむかって退場し、一万の兵の目が、それを見送った。やがて粉雪の舞うかなたに西郷の姿が見えなくなると、吐息ともつかぬざわめきが、波のように各隊におこった。

それが、儀式の事実上の終了になった。各大隊の一番小隊長が、大隊長に代わって声をあげ、解散を令した。解散の号令がくだと、兵たちはその場で隊伍を解いた。

「私は弾薬が足りません」

と、小隊長に申し出る者もあった。小隊長は輜重へ行つてかけあい、定数だけ補つてやつたりした。各自が携行すべき弾薬は、百発だった。

磯（地名）の異人館においては、英国の外交官アーネスト・サトウが、薩軍の出発状況について、ぬかりなく情報をおつめ、観察している。

伊敷村玉江で閲兵式のあった二月十四日は、午後から雪がひどくなり、夜になって吹雪になった。サトウはこの日の天候について、

「吹雪が、終日、怒りくるったようにふきすさんだ」

と、日記に書き、かつ別府晋介にひきいられた別働の郷士二個大隊が、閲兵式に参加せず、加治木から直接進出したことについても、ごく簡単ながら、

前衛、本日出発した様子。

と、正確に書いている。たれかにきいたのであろう。二個大隊の郷士軍は、たしかに二月十四日午前八時に加治木を進出した。

かれら二千人は、この日午前六時に、加治木の綱掛川の河口付近の広場にあつまり、別府晋介の統率下に入っ

た。

別府晋介がこの二個大隊の統率者になったのは、かれが加治木の区長をしていたからであり、この私学校式の行政組織をいわばそのまま軍隊化したといっている。

午前七時、かれは馬上で閲兵したあと、小隊長以下の幹部をおつめ、

「われわれは全軍の先鋒になり、横川をへて大口より県外に出、肥後（熊本県）の野に入る。他の大隊はあすより逐次、われわれに追隨する。諸士に伝えよ、城下士に負くるな、と」

と、生来、明晰な口跡のかれは、いちだんと爽かに言い放って、訓示した。

かれらは山河を踏みやぶるような勢いで北上したが、この日の夜から烈しさを加えてきた吹雪が翌日いよいよ猛りくるったため、県外の肥後境の山をこえるまで行軍三日を要し、凍傷のために落伍する者も続出した。

一方、鹿児島庁下においては、十五日出發組の一番大隊と二番大隊が、午前六時、ふりつもった積雪を踏んで、